

板石塔婆

板碑（いたび）は、13 世紀から 16 世紀にかけて日本で一般的に見られました。一般的に、供養の対象や内容が刻まれ、信仰者が仏教の道からそれないようにするためのものでした。妻沼聖天山歓喜院の近くにあるものを含め、関東地方の板碑は、埼玉県秩父市・小川町で採掘された緑色の緑泥石片岩でできています。

妻沼聖天山歓喜院の板石塔婆には、阿弥陀如来、脇侍に観音、勢至両菩薩が半浮き彫りにされています。この画は、6 世紀にインドから持ち込まれた、善光寺（長野県）の一光三尊阿弥陀如来像を再現したもので、日本に持ち込まれた仏教画の中でももっとも古い部類に入るものと考えられています。一光三尊阿弥陀如来を囲んでいるのは、一つの光背です。

板碑の裏には釈迦牟尼（しゃかむに）と 2 人の従者（文殊菩薩と普賢菩薩）の名前がサンスクリット語で刻まれています。板碑の彫刻は、鎌倉時代（1185～1333）に施されたものと思われます。板石塔婆の大きさは、高さ 178 センチ、幅 59 センチです。埼玉県の有形文化財に指定されています。